Japanese Association for Religious Studies

『宗教研究』85巻3輯（2011年）

展望

第九回ドーハ諸宗教対話会議報告記

渡辺　学

私は、外務省の打診により日本宗教学会の推薦を得て小原克博同志社大学教授（同大学一神教学際研究センター長）とともに二〇一一年十月二三～二六日にカタール国のドーハにおいてドーハ国際諸宗教対話センター（Doha International Center for Interfaith Dialogue（DICID））によって開催された第九回ドーハ諸宗教対話会議に招聘された。本会議はきわめて大規模であり、公式発表によると六十カ国以上から二四二名の参加者があったとのことである。

ここでまずカタール国の概要を説明してから同会議について報告したい。

カタール国は、一九七一年にイギリスから独立した若い首長国である。面積は長野県よりも多少小さく、人口は一四〇万人ほどで同県の半分程度である。主な宗教はイスラームのスンナ派が八〇％ほどであり、シーア派とワッハーブ派がそれぞれ一〇％ほどを占めている。公用語はアラビア語であるが、英語も政財界を中心として広く理解されている。カタールは石油を産出するだけでなく、天然ガスが今後二百年枯渇することないほどの埋蔵量を誇る豊かな国である。

同会議は、カタール政府の強力なバックアップにより二〇〇一年九月一一日の同時多発テロによって分断された世界情勢を顧みて、イスラーム世界のイニシアティブによってユダヤ教、キリスト教、イスラームという三つの一神教の相互対話を促進するために開催されるようになったと考えられる。そして、開催主体となるドーハ国際諸宗教対話センターは、二〇〇七年五月開催の第五回会議の際の推薦により二〇〇八年五月に公式に開設された。

ドーハ国際諸宗教対話センターは、異なった信仰を持つ者の平和共存の実現と諸宗教対話の国際的な参照枠となることを想定している。また、同センターは、「1他者に対する平和的な寛容や受容を唱道するセンターとなり、2人類の課題となっている諸問題に対する解決策を見つける宗教的な価値を活性化し、3宗教と相互に影響を与え合う生活の諸側面を含む対話の視野を広げ、4研究者や学者だけの対話でなく、宗教的価値と実生活の問題の関係に関心のある人々との対話に従事している人々のネットワークを増進し、5この分野における学術情報、教育情報、トレーニング情報を提供する権威となる」ことを目的としている。

また、同センターは、カタール大学学長であったイブラヒム・サレー・アルナイミ教授（専門は化学）を理事長とし、多くのカタール大学教授が理事を務めるとともに、海外のキリスト教徒やユダヤ教徒の著名人を評議員としている。

同センターは、さまざまな信仰を持った人々の間の建設的な対話を追求することをうたっているが、事実上、ユダヤ教、キ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

リスト教、イスラームの三つの一神教のみを対象としていることは否定できない。

第九回ドーハ諸宗教対話会議のテーマは、「ソーシャル・メディアと諸宗教対話――新たな関係」であった。ソーシャル・メディアとは、twitter、facebook、ブログなど、個人によるネット上の情報発信のことを意味する。

同会議の企画書には以下のように書かれている。「若い果物売りがチュニジアや多くのアラブ諸国の政治的革命を触発するとはだれも予想していなかった。しかし、［チュニジアの］忘れられた州（シディ・ボウジド州）で［果物売りの］仕事をするのを女性警察官に妨げられたとき、モハメッド・ボウアジジはそのことに触発されて自らのからだに火を放ったのであった。そして、膨大な twitter やブログや facebook のメッセージが世界各地に事件の詳細を広げることになった。…さらに、チュニジアやエジプト、北アメリカや中東の他の場所で起こった民衆革命に加えて、かつてないスピードで情報を拡散したソーシャル・メディア・ネットワークの若きデモンストレーターや活動家によって用いられた現代の電子メディアにはもう一つ別種の革命があった。市民やレポーターはこれらのツールを用いて、時々刻々とこれらの出来事を発信することによって電子メディアにラディカルな変化を生じさせたのだった」。

このように、同会議は、はた目では「火中の栗を拾う」かに見える事態に積極的に取り組み、ソーシャル・メディアが諸宗教対話にどのような変化をもたらすのかを見極めようという先進的で意欲的な試みをしようとしたのである。まずその点を高く評価しなければならない。

本会議が柱としたテーマと日程は以下の通りである。

第一日（十月二四日(月)）　午前九時―午後五時半

＊オープニング・セッション

＊全体セッションⅠ

主題Ⅰ　コミュニケーション・テクノロジーの出現、歴史、発展

①ソーシャル・コミュニケーションの手段、サイト、サービス、利用の概観

②洗練された対話のツールにおけるソーシャル・コミュニケーションの手段の利用

③新たなテクノロジーを用いて個人間の対話や集団間の対話におけるコミュニケーションの手段をいかに利用するか

＊全体セッション

科学と宗教（イスラーム世界科学アカデミー共催）

＊パネル・ディスカッション・セッション（1）

主題　ソーシャル・コミュニケーションの最適利用

＊スーク・ワキーフへのツアーと公式晩餐会　午後七時―十時

第二日（十月二五日(火)）　午前九時―午後五時半

＊全体セッションⅡ

主題Ⅱ　諸宗教対話におけるソーシャル・メディアの利用の利点

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

①諸宗教対話のセンターやこの領域に興味を持ったり従事したりしている人々の間でのコミュニケーションや協力の創出におけるソーシャル・コミュニケーションの重要性
②すべてのユーザーの意見や表現の自由の尊重
③諸宗教対話のセンターは、ソーシャル・メディアを通じて諸宗教の信徒が共存するのに最適な環境を生み出すことによって利益を得る

＊全体セッションⅢ
主題Ⅲ　さまざまなコミュニティにおけるソーシャル・メディアの利用に関する反省
①ソーシャル・コミュニケーションは、伝統や慣習の弱体化や社会的関係の縮小にいかに貢献してきたか
②宗教的コミュニティにおけるソーシャル・ネットワーキングのサイトの誤用
③新たなテクノロジーの利用の倫理

＊パネル・ディスカッション・セッション（2）
主題　ソーシャル・コミュニケーションのツールの賛否と諸宗教対話の活動に関する反省

＊ドーハ・シェラトン・ホテルでの晩餐会　午後八時―十時

第三日（十月二六日(水)）　午前九時―午後二時半

＊全体セッションⅣ
主題Ⅳ　ソーシャル・コミュニケーションを諸宗教対話の問題に積極的に利用すること
①現代のコミュニケーション・テクノロジーの利用効果とアラブ諸国における自由化の発展との結びつき
②このテクノロジーを用いていかにして対話を若者に近づけることができるか
③ソーシャル・ネットワーキング・サイトの登場は、若者の見解の自由な表現の飛躍的な増加をもたらした。成功体験（エジプトの革命とチュニジアの革命）の例

＊全体セッションⅤ
主題Ⅴ　ソーシャル・ネットワーキングのツールから社会を守るための宗教的枠組みや倫理的規制を開発すること
①建設的な対話という目的のために情報とコミュニケーション・テクノロジーを使いこなすことの挑戦
②コミュニティ開発のルネサンスにおいてソーシャル・ネットワーキング・サイトのためにいかにして個々人を宗教的に準備したり適任なものにしたりするか
③ソーシャル・ネットワーキングの利用のためのグローバルな行動規範の必要性――宗教的視点から

＊最終セッション

＊文化村「カタラ」へのツアー　午後六時半―八時半

第九回ドーハ諸宗教会議の特徴としては、以下の点を挙げることができる。

第一に、政治的な色彩が強いこと。開会挨拶は、主催者のアル・ナイミ理事長だけでなく、カタールの法務大臣ハッサン・ビン・アブドゥッラ・アル・ガヒム氏が行っているし、ビデオ参加ながらゲストスピーカーとしてポルトガル共和国前大統領

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

のホルヘ・デ・サンパイオ氏（社会党所属の不可知論者）が参加している。また、アメリカ合衆国において民主党政権に強い影響力を持っているジェシー・ジャクソン牧師も講演者となっている。さらに、ユダヤ教徒の代表者が南北アメリカやヨーロッパからも選ばれて参加し、講演を行っている。（ただし、現在、カタール政府はイスラエル人の入国を認めていないため、イスラエルのユダヤ教徒の参加はない）。さらに、ボスニア＝ヘルツェゴビナ、バングラデシュ、スーダン、をはじめとして、世界各地のムスリムの代表が招かされていて多数派を占めていることが指摘できる。

第二に、一神教徒の対話に限定していること。ここで対話の当事者として考えられているのは、ユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムだけであり、ヒンドゥー教、道教、仏教、神道などの代表は含められていない。その点、不可知論者のサンパイオ元大統領は例外である。とりわけ、日本のように一神教徒が一パーセント内外の国の代表をカトリックやプロテスタントが務めるのは、日本の宗教状況の実情を反映しているとは言えないだろう。

第三に、対話のテーマ設定が信仰の問題ではなく、今日的な問題に限定されていること。とりわけ印象的であったのは、ソーシャル・メディアに対するユダヤ教、キリスト教、イスラームの観点からの評価といったものが一切語られなかったことである。つまり、「ソーシャル・メディアと諸宗教対話」という共通の問題について、それぞれの代表が諸宗教対話の経験やソーシャル・メディアと「アラブの春」の経験などを元にして、語り合うというスタイルのものであったのである。したがって、それぞれの宗教的な視点がぶつかり合うという性質のものでは一切なかったということが指摘できよう。

第四に、多くの女性が講演者や議長に選出されていたこと。これは、イスラーム主催の会議ということで言えば、大きな収穫であった。単純に比較することはできないが、わが国の宗教界や宗教学界と比較しても、はるかに女性に対して開かれている印象を持った。

第五に、参加者に高齢者が多かったこともあり、ソーシャル・メディア・ワークショップがセッションと並行して行われていたこと。これらは、初級と中級が同時に二日にわたって開催された。つまり、このテーマ自身が最新の状況を反映しているように、ソーシャル・メディア自体に対する入門もサービスとして提供されていたのである。

第六に、セッションのスタイルとしては、議長、報告担当者、七名前後の講演者が壇上に上がり、二時間ほどの時間枠を費やすこと。これに関しては、事前の時間配分に関して十分に周知徹底していなかったため、一人で数十分も費やす講演者がいたりして、セッションによってはすべての講演者が講演をしただけで時間をオーバーしてしまい、一切質疑応答がなかったものも多々見られた。その点、司会者の技量にすべてがかかっていて、有能な司会者の元では、発表がすべて十数分以内に限定され、十分に議論の時間が残されたものもあったが、それはむしろ例外であった。

第七に、公用語が英語、フランス語、アラビア語であり、同

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

時通訳が付されていたものの、それぞれの言語が特定のチャンネルに固定されているわけではなかったこと。今回、出席してみて、アラビア語がムスリムにとって世界共通の言語であることを改めて思い知らされた点では有意義であったが、同時通訳のチャンネルが予告なく跳んでしまうため、私自身、パネル・ディスカッション(1)の報告担当者として壇上でノートをとっている際にも英語チャンネルを探して難儀をするような場面が何度もあった。その点、同時通訳に関しては改善の余地があるように思われた。

今回の会議に関しては、「ソーシャル・メディアと諸宗教対話――新たな関係」というテーマ設定からわかるとおり、きわめて意欲的なテーマながら研究史が成立していないのは当然のことである。そのため、かたや体験談、かたや一般論が散発的に繰り返される状況であった。そのため、それぞれの体験や自説の表明が行われて、大会自体として何らかの議論の深まりがあったかというと、それはあまり感じられなかった。

最後に、本会議は、最後に宣言を採択して公表しているので、その一部を個々で紹介しておきたい。「全体セッションは、初級と中級のソーシャル・メディアの理論と利用に関するワークショップによって補完され、若者がさらに正義と平和によって世界を構築する責任をとるにつれて会議の重要な点で若者の貢献を強化した」。「1われわれは、以前のドーハ会議に則って、異なった宗教の人々が信頼と誠意、自由と相互の尊重の雰囲気を醸成するよう宗教的権威や教育の権威に呼びかける。2この第九回ドーハ会議の関心に基づいて、われわれは、純粋なコミュニケーションとそれに伴う協力のためにソーシャル・メディアを用いる手段を探求するようあらゆる世代の男女に呼びかける。3われわれは、社会的領域、個人的領域、スピリチュアルな領域など多くの領域における理解や協力の改善のための関心やビジョンをもたらすようにとりわけ若者に呼びかける。4本当の対話や協力を実行するために、また、可能な限り広く、国連やユネスコのような権威、また、さまざまな宗教的権威にこれらの規範や提案を伝えるために、ソーシャル・メディアの責任ある使用のための行動規範や提案を開発するように、本会議は、ドーハ国際諸宗教対話センター（DICID）に勧告する。5われわれは、ローカルなレベル、地域レベル、国際レベルで諸宗教対話を強化するために、電子的なソーシャル・メディアを利用するフォーラムの展開をDICIDに勧告する。6われわれは、宗教やその象徴を尊重しソーシャル・メディアの乱用を妨げるように、さまざまな宗教的な権威や世界中のよき信仰を持った男女とさらに効果的なコミュニケーションを展開するようにDICIDに勧める」。

このように、カタールは中東の小国ながら、ユダヤ教、キリスト教、イスラームという一神教の間の対話に関して大きな貢献をなしている。われわれは、今後ともその動向について注視して学ぶべきは学び、また、貢献できることがあれば、積極的に貢献していくべきであろう。

私自身、パネル・ディスカッションの報告担当者として会議の一翼を担うことができたことを名誉と思うとともに喜びと感じていることを記して、私の報告としたい。

NII-Electronic Library Service